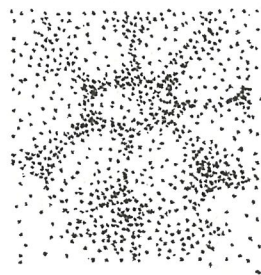


想

随



カット・谷川修三

回顧と展望

青井 厚

この度編集部から随想の原稿をたのまれた。おそらく私が永い間同志社に勤めているせいであろう。したがって過去の追想や将来への展望をかくことが、おそらく編集者や読者への忠実な態度ではないかとおもう。

私が同志社をはじめて意識したのは、大正の中期、当時博文館から出ていた「中学世界」で安部磯雄先生の記事とともに、クロバーの萌えている同志社普通学校の写真を見たときにはじまる。故郷福井の小学五年生のころである。昭和二年の春予科一年に入学したのであるが、今のクラーク館の東側の若草の上で新入生歓迎会があり、桜吹雪の中で総長海老名弾正先生が莊重典雅な風采で歓迎の辞と祈りをささげられた光景が昨日のように生々しく、また美しく残像としてある。あるとき国語のN先生が作文で将来の方針を書けといわれたことがある。私は教員になりたいと希望にみちて書いた。私の一生はそのとききまつたようである。予科生の時代に文学や哲学に興味をもち群書を乱読した。漱石の「こころ」を何度も読みかえした。友人も多く洛中洛外をよく語りよく歩いた。とくに浪人してきた苦勞人とよく気があうようだった。「友に倦み、友を恋うらむ今日もまた、紵ヌメの森をさまよう我は」これは私の混沌時代の作品である。予科から本科にすすむとき、学部を選定に迷った。とうとう締切の朝まで

かかって「経済」にきめた。生きて動く現象を研究対象にすることが、当時の私の混沌を打開してくれるのに役立ったのである。学部時代に住谷先生はじめ諸先生の学恩をうけた。昭和八年三月卒業して、卒業即失業の苦勞をした。家庭の事情もあって故郷にかえり、また上洛して夜学の教員をしつつ京大の哲学科の選科に入った。田辺元先生の、糸をほぐしてゆくようなめらかさでしかも綿密な講義がいまなお脳裡にやきついている。昭和十三年の春、当時校長であつた難波先生のすすめで同志社専門学校の講師となり、当時は授業のほかに教務が多かった。その後戦争もはじまり、いろんな苦勞があつた。昭和二十四年新制大学移行とともに文学部に移り現在に及んでいる。爾来「社会学」「社会病理学」を担当しているが、つい社会哲学に流れこむのを警戒している。

多年にわたり多くの学生諸君に接し、つくすことの少なかつたことを愧じている。しみじみおもうことは、「教えることは学ぶことである」ということである。教育や研究にはこの謙虚な態度が必要とおもわれ

る。

「夢みる力のない者は生きる力もない」
泰西の哲人の言葉をおもひ、夢に生き夢を
作って明日に生きるよう努力したい。「日
々新者不老」

できればまた機会をみて海外の学会に出
て、学問上の新風をうけて教育と研究には
げみたいとおもう。

(大学文学部教授・社会変動論)

水銀に寄せる

——のらりくらりの

瓢箪なまず——

末光力作

今週はあと五匹アジが食べられる。
なんていう会話が交されるほど、いやはや
ものすごい時代になってきた。水銀という
文字を見ない日は無いほど、毎日の新聞に
は水銀汚染の記事が目につくが、一日も早
く関係企業が完全な水銀除去装置を設備す

るよう望みたい。

わたしたちは水銀というと何か非常な猛
毒を連想するのである。しかし考えてみる
と水銀の生理活性に関してわかつている点
は実は余り多くないので、世界的に有名に
なった水俣病にしてもそれがメチル水銀に
由来していることがわかったのは、ごく最
近のことである。量にもよるが、水銀化合
物すべてが猛毒であるといえ、これはい
い過ぎであろう。薬と毒とは紙一重という
が、水銀というと目の色を変える人が、何
のくったくも無く切傷をすると水銀剤赤チ
ン(マーキョクロム液)のお世話にな
る。世間には赤チンが水銀剤であることを
知らない人もかなり多いのではあるまい
か。そういえば、神社の鳥居の朱もれっき
とした水銀化合物である。

農薬の酢酸フェニル水銀も数年前から使
用禁止になった。適当な処置であったと思
う。しかしおちついて考えてみると、この
農薬が戦後から長い間はたしてきた功績も
正当に評価せねばなるまい。あの敗戦以
来、私たちが筆舌に絶する食糧不足を乗り
越えて現在インドやバングラデシュに見ら

れるような餓死のうき目にも会わず、一億
の民がこの狭い国土に何とか生き延びてこ
られたのは、稲のイモチ病の特効薬、酢酸
フェニル水銀があつたればこそである。だ
からこの農薬に、使命を終って舞台を立去
ってゆく名優に対するように、ご苦労様とい
って拍手の一つもおくりたい気さえする。

先日、私は歯の治療のため歯科医にかか
ってふと気づいたことがある。歯の治療に
は水銀はなくてはならぬもので、水銀と銀
との合金(アマルガム)を歯科医は毎日の
ように使うのである。水銀は若干ではある
が蒸発するから、歯科医は毎日のように水
銀の蒸気を吸うことになる。おまけに患者
がかかる度ごとに手を昇汞水(塩化第二水
銀溶液)で洗うから、水銀とはかなり親し
いおつきあいをしている私たち化学屋なん
かよりも、さらにずっと水銀に接する機会
が多い。しかし歯科医が水俣病の症状を示
したという話はついぞ聞かない。馬鹿とハ
サミは何とやらいうが、水銀も上手に利用
して、あと処理さえ完全にやれば有益に利
用できる。悪いのは水銀使用後のあと処理
の不完全さ、すなわち、たれ流しに問題

があるわけである。角を矯めて牛を殺すの愚をしてはなるまい。

古代の錬金術者たちは当時知られている七つの金属——金、銀、銅、鉄、錫、鉛、それに水銀——に天体の七つの惑星をあてはめて命名した。すなわち金を Sol (太陽のラテン語)、銀を Luna (月のラテン語) というぐあいで、銅は Venus (金星)、鉄は Mars (火星)、鉛は Saturn (土星)、錫は Jupiter (木星) となった。そして最後の水銀を Mercury (水星) と命名したのである。ここで面白いのはマーキュリーはギリシャ神話によると、神々の使の神で、足には翼がついていて飛ぶように走ることができた。それになかなかの雄弁家で、職人や商人の守護神でもあった。ローマ神話ではマーキュリーのことをヘルメス (Hermes) ともいっているが、同一の神様である。

さて錬金術者たちは、水銀が普通の金属と違って液体であるために、いささかとまどったに違いない。たえず流動してつかみ所のない水銀に商売の神様の名のマーキュリーが付けられたのは、偶然とはいえまこ

とにピッタリな気がする。大体、商売というものは、始めから余りはつきりとしたことはいわれないものである。そこにはまずかけひきがある。大阪商人の日常の挨拶に「儲かりまっか。」、「そうでんなあ、まあまあだすわ。」とか「まあとんとんだすわ。」というのがある。前者はまず売行は上々の部、後者でもかなりの成績が上がっているとみてよい。「さっぱりだすわ。」といったとしても、まあ中位であろう。

「おかげで儲かりますわ。」といえれば非常な儲けがあるのでよほど親しい間柄でもない限りいわないものである。儲かっていても、「まあまあだすわ。」というのは、人に羨望の思を与えないためと、もう一つは逆に人から「なんだ儲かっていないのか。」と馬鹿にされないことを考慮した発言である。これも生活の知恵であろうか。このように大阪商人の間でかわされる会話はドロドロしてつかみどころの無い水銀的な話術なのである。

大阪を語ったので、今度は京都の番であるが、由来京都人はなかなか自分の意見をいわず、甲の意見を乙に取り次ぎ、乙の意

見を丙に取り次ぐ、いわゆる周旋屋が多いといわれている。これなども京都式の水銀的処世術であろうか。そういえば革新政党的の中にも時々この種の人種がいるもので、口の悪い人は、あいつは右往左派だ。」といったりするが、おそらくヘルメスジンでも飲みすぎて頭にきたためであろう。

私たちの間でも、学会誌に論文を投稿するとき、……のように思われる。とか、……のようだが今後の研究に待たたい。とか述べて断定を避ける表現をよく用いることがある。いうなればサラッと逃げるわけである。しかし最も正確な表現を要求される物理学においてさえ、スピンは廻るが如く、また廻らざるが如く。とか、光は波動にして粒子、粒子にして波動。などといった一見わかったようでわけのわからぬ禅問答はだしの表現がまかり通っているのだから、どこの世界にも水銀のように流動してつかみ所のない一面があるものと見える。してみるとマーキュリーは商売の守護神だけではなくて、範圍を学問の領域にまでひろげねばなるまい。

(大学工学部教授・有機化学)

笑顔の仮面

大橋寿美子

P氏と私がエレベーターに乗っていると、ころに、扉が開いてL氏が入ってきた。「やあ、今日は。」「P先生はいつもにこにこ楽しそうにいられていいですね。」「いやあ、とんでもない、つまらぬことばかりで……」という会話が交される。そばでこの話を聞いていた私はくすりと笑いたくなった。だって、L氏が入ってくるまさに直前までP氏は「この頃は不愉快なことが多くて気分がわるくて……」と私にこぼしていたところだったのだ。苛々と不気嫌であっても部外者に対しては笑顔をつくって応待する、これは私たちが日常生活の中で多かれ少なかれごく自然にやっていることである。それは社会人としての礼儀であり、義務なのだ。特に教師たるもの、どんなに疲れていても学生の前ではちゃんと

ていなくてはならない。会社員も商売人もそうだ。社会の中で人はみな多少とも仮面をつけることを余儀なくされているのかもしれない。

だが、時として、この礼儀的仮面は混乱や不安をもたらすものとなる。芥川の「半巾」もその一例であるが、私もかつて通夜の席で、夫を失ったばかりの未亡人が微笑をつくって参列者に礼をかねすのを見てひどく驚ろいたことがある。その微笑は明らかに不調和であった。その人は素直に悲しそうな顔のままでいるべきであった。だがしっかりした人だったから、とり乱した様子をみせまいとすれば笑顔をつくるほか仕方なかったのだろう。なんと痛ましい笑顔の仮面の習慣であることか。しかしこれはまだよい。より厄介なのは、嫌な顔をすべき当の相手に対しての偽りの笑顔である。「いやな奴!」と心の底に思いながら笑顔で応待することの可否がとりあつかわれているのが、モリエールの傑作「人間ざら」である。一切の社交辞令を拒否し、不愉快とか軽蔑など自分の感情を卒直に顔にあらわす主人公のアルセスト。それでは世

の中はわたれぬと忠告する常識的社交人のフィラント。この二人の対話は三百年をへた現代においてなお新鮮である。人があらゆる虚偽を排し、仮面を捨て、自己に忠実に生きることはいづの世でも難かしい。この戯曲は主人公のアルセストが、虚偽の社会を捨てて砂漠の中に一人で暮しに行こうと叫ぶところで終わっているのだが、現代においては、ほろ苦い共感をよぶ主人公のふるまいは、ルイ十四世の君臨する華やかな宮廷においては全く滑稽なものとして描かれたらしい。仮面の要求度は時代と社会によってかなり違うのだ。

日本にやってきたフランス人の友は「日本人は皆ほえんでいるのね!」と驚ろいた。ジャバニーズスマイルの仮面の定着であらうか。中でも京都人の腹黒いものやわらかさは定評がある。この住みにくい世の中で人がみなにこにこしていればうす気味わるい。といって、みな怒り顔をしていれば、ますますすぎすぎした日常になるだろうことも明らかである。ああ、とかくこの世はややこしい。

(女子大学助教授・仏語)